2021年３月３日

**かわたれ時代の幕開け―**コロナ禍を奇貨とする人間賛歌―　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　濱口晴彦

はやぶさ２は２０２０年１２月地球に、６年間で３０億キロ以上宇宙を旅して小惑星リュウグウの貴重な天体資料が入ったカプセルをおとぎ話の玉手箱のように届けてくれた。日本国中がはやぶさ２のこの快挙に大喝采。遠い遠い宇宙が身近に感じられた瞬間だった。広大な宇宙には、たくさんの不思議があるが、「かわたれ」もそのひとつ。この宇宙現象はある星の有様を指す言葉なのだが、この言葉にあやかった「かわたれ時代」の幕開けはコロナ禍で意外に早くやってきた。

**１．かわたれ時代の到来**

まだ明けやらぬ早朝、南東の空にひときわ明るく輝く星がある。金星である。この星のことをかわたれ星とも言う。あたりはまだ暗く、誰彼の見分けがつかない時間帯の人びとの動静を探るために、彼は誰かと誰何（すいか）するかはたれに由来する言い方である。かわたれはその昔、夕闇と漆黒の夜と明け方の薄明が人びとの暮らし方を支配していた時代であったからこその呼び名に由来しているが、コロナウイルスが猛威を振るっているゆえに今日、明日を見通し難く読み取りにくい時代の先行きを、これからどうなるのか近未来の視点から誰何したいと思うゆえに、この比喩を活かしてかわたれ時代と命名できるだろう。ご同意いただければありがたい。

さて説明が長くなったが、この時代状況を切り拓き道をつけようとする意志の下、かわたれという言い方が有効であるためには、われわれが生きている時代の方向性を積極的に誰何して明るさを取り込んでいく意思を必要とする。かわたれ時代とは２１世紀ルネッサンスの別称なのである。

彼は誰だろうという消極性と金星という方向を指し示す積極性を含意するかわたれという言い方は、われわれが生きている現在、この現在が今後いかなる方向を辿って行くのかを模索する中から次第に視界が開けていくという展望に明るさを添える言い方だ。かわたれ星は、時代の構造的組成を読み解き解釈し、問題点を組み立て替え好機に転換しようとする方向を指し示す位置取りの目印である。かわたれ時代だからこそ時代感覚を聡明かつ鋭敏に磨き上げるチャンスだ。

**２．姿を現した世の仕組み**

あたりはまだ暗いが暗い故に見えてくるものがある。生活に溶け込んでいるかわたれ星を探すという人間だけができるこの思いつきに駆られて天空を見上げよう。見上げて探し得たかわたれ星の方向指示感覚を生かして足元を見つめると、つぎのうたのように浮き出て見えてくるものがある。

コロナ禍で

　浮き出て見える

　　世の仕組み

という歌（元歌は２０１１年の東日本大震災を歌った　地は揺れて／浮き出て見える／世の仕組み　の首部を置き換えた）に促迫されてこの世の仕組みを摘出すると、地球規模での環境問題、新自由主義的経済活動とその帰結として生じた働き方の多様化と社会的格差の拡大と貧困の蓄積、そこから帰結する日常生活の諸問題に対峙する政治状況といったマクロからミクロまでをふくむ数々の課題が目につく。

地球規模の環境問題は今や待ったなしの状態で日常生活を脅かしている。人間はひとつしかない地球を、１，６９個分に使いまわしてより豊かな生活を希求し、地球資源を蕩尽し生活している。その結果、超大型台風の襲来、異常な寒暖気温の常態化、約３０の新しい感染症（エイズ、エボラ出血熱、SARS、鳥インフルエンザ、新コロナウイルスなど）の出現により日常生活-が脅かされている。

生態系が破壊され、熱帯雨林が破壊され、経済活動が破壊され、働き方が破壊され、人間関係が破壊されて日常生活が立ち行かなくなって気づいたことは、資本主義経済体制の限界というシグナルがひときわ濃く点滅していることである。この問題は１９１７年に経験した資本主義と異質の社会主義経済制度の登場により、その選択が現実的な問題となったが、資本主義体制の体内で育った来た民主主義の有効性の発揮によって回避された（日本では天皇制との絡みから、学術的にも実質的にも多くの不幸を伴い論議を深める基盤に欠けていた。１９２５年成立の治安維持法は資本主義体制と天皇制の維持の２点に特化されていて、この考え方が明治以降戦前昭和の１９４５年までの日本の骨格となっていたが、同法は１９４５年１０月廃止された）が、経済が成長すれば生活は豊かになるのかという根源的な問いが浮上してきている。

経済変動を表示する記号にV、S、Lの３文字がある。Vは成長停滞から反転して成長へ、Sは成長から安定的定常状態へ、Lは経済活動が経済停滞への変化消長を表示するイニシャルとして使われているとすれば、コロナ禍前後のイニシャルはKではないだろうか。

日本のビリオネア（資産10億円以上）の資産の推移は、２０２０年３月から２０２１年２月の１年間に１２．２兆円から２４．４兆円に倍増しているが、失職による生活困窮者が増加しているという現実をイニシャルで表示するとすればKである。Kは少数の富める者と多数の貧しいものとの社会的格差の拡大を表示するイニシャルである。そして上述の歌に歌われている世の仕組みという認識は、コロナ以降の日常生活でポジティブな生活者として何を視野に収めなにを成すべきかという問かけを含んでいる。

この問いかけには、環境問題解決の不可避性と緊急性が前提にあるので、見たことを見ないことにしてすませられないという倫理的要請を含んでいる。

環境問題は一国の問題対応では対処しきれない広範で根深い問題である。このことについてシニア社会学会２０２０年大会の文書発言で、フロンティアは国連が２０１５年に作成提案した持続可能な開発諸目標SDGsにあると発言したことがある（同学会誌『エージレスフォーラム』２０２０年を参照ください。但し現時点で-は未刊）。

SDGsは「誰一人取り残さない」をモットーにしている。このモットーは７つのゴール―人間、繁栄、地球、平和、パートナーシップをとおして追求されるし、地球1個分の経済活動による環境問題の解決を要請している。人間とその経済活動の調和点として環境問題が据えているが、この視点を共有することが２１世紀の政治的課題である（南　博・稲葉雅紀『SDGs-　危機の時代の羅針盤』岩波新書、2020年参照）

**３．コミュニティ、人生劇場の舞台**

袖井孝子シニア社会学会会長は、同学会新年の辞（２０２１年度ニュース参照）で、「社会における格差と分断を解消する、、、、、、、解決策としての鍵がコミュニティにあるという結論に達し（た）」と発言している。この発言を手掛かりにコミュニティがらみの問題点に接近してみたい。

コミュニティは人びとのつながりとそのつながりを介して情報がよどみなく流れるネットワークからできていて、その有様を社会関係資本というが、社会関係資本がよどみやねじ曲がりが生じないように苦心する対応の仕方にお国柄が出てくる。それが比喩的にいうなら、コミュニティで生活するとできあがる織物の絵柄である。

日本を象徴するのは富士山へ寄せる日本人の精神性やすしの新鮮でシンプルな視覚性、さらには簡素な食習慣だけではない。おてんばは国際化で普遍化の中に昇華されて目立たなくなったが、おもてなしの和やかさなどは日本人の身体技法に昇華されていて、今なお優位性を保っている。お蔭さまもそうである。二界由理子は日本人の日常生活を取り仕切る潜在能力を「お蔭さま」という詩で詠っている（詩中の／は改行を示す）。

あなたはよく「お蔭さまで」と言う／さりげなく言っている／何気なく聞いているわたし

他の国にこういう表現が／あるかどうか知らないけど／いつも実に好ましいと思う

陰になるべき存在を／ぐいと表に出して／そのお蔭で生きて／いますという言い方は／ひととひととの間を／とてもやさしくつなぐ

そのお蔭でまた／生かされていますという／言外の深さを秘めた／不思議な言葉だとしみじみ思う

お蔭さまという言い方は物事を曖昧化してしまう恐れはあるものの、日本人のソフトな身体技能のひとつで、勇気と表裏の間柄であり、日常を円滑に保つ言葉であり続けるのではないだろうか。チャップリンの「知恵と勇気とサムマネー」という至言を貫いているスピリットは弱者への優しさ、驕れるものへの揶揄である。勇気があってもなかなか行動に移れないとき、お陰さまはその人の背にそっと優しく手を添える仕草であるのかもしれない。お蔭さまは人びとの中に息づいている万能の活性剤である。

コミュニティは文化の揺りかごである。その揺りかごの中を覗き込むと、そこに誰もが口ずさめる故郷やこいのぼりの歌の旋律を貫いているセンチメントの数々に混じって、お蔭さまも所を得て収まっているはずである。繰り返しになるが、コミュニティは帰属感のある立ち位置、相互信頼、日常的包括性、独特の匂いを持つ空間的広がり、走馬灯のような時間の流れ、関心の共有などを糧に存続している。

このコミュニティにコロナウイルスが襲いかかった。カミユの『ペスト』で描写されている市民たちは現場に留まるもの、密かに隔離をかいくぐって脱出するものなど、それぞれが差し迫る危機対応で利害を判別して行動する。そこには世間に配慮して行動選択するものの判断が入り込む余地がない。

**４．密回避作法の効用**

かわたれの時代の幕を上げは計算され尽くした試みだけでなく、意図せざることがきっかけとなり、幕揚げのカギを握るということがある。ドイツで言い伝えられている寓話を手掛かりに考えてみよう。

　ドイツで２匹の蛙というジョークが語り継がれている。物事を悲観的に考える蛙と、物事を楽観的に考える蛙がいた。あるときその２匹がふとしたことで牛乳桶に落ちてしまった。悲観的に考える蛙はあきらめてしまい、やがて溺れ死んでしまった。もう一匹の楽観的に考える蛙はじたばたもがいていた甲斐あって、翌朝気が付くとチーズの上に座っていたというのである。

この話は現研究会の前身、シニア社会学会の老若共同参画社会研究会が編集した『シニアから、５２の提言』というハンドブック（４３ぺーじ、２００７年刊）の「まえがき」に引用記載したところ、ある著名なドキュメンタリー作家が注目してくれて、ドイツでいつごろから言い伝えられているのかなど問合わせがあった。私はこのジョークを『花・ベルツへの旅』（真須美・シュミット・村木、講談社、１９９３年）からの孫引きなので、十分承知していないなど事情を話して、話はそれで終わったが、その作家は一冊の著書にまとめて出版し、そんなかかわりから寄贈を受けた（その書名を提示したいが、図書整理がままならず、探しあぐねている始末）。意図した努力はそれ相当の成果（チーズになった）を生み出した。かわたれ時代は、この言葉の由来から、前途不透明を切り拓くにはトライする意気込みがあればかなう人間信頼にもとづいて成り立っている。

２０２０年後期の第１６４回芥川賞は『推し、燃ゆ』で、作者の宇佐見りんは１９９９年生まれの大学２年生。受賞者とこの文章の書いている私との年齢差はあまりにも隔たりすぎるゆえに、時代の見えにくいものがかえって見えてくるようだ。たとえば次のように。

吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』はコぺル君の成長物語として社会的自我形成の一齣が注目を引いているが、こうした問題設定の対比がもどかしいくらい自己形成が当然のように出来上がっている。社会的自我形成という問題提起は序章であって、今や私は公の存在要件をみたし、日本には私の集合から成り立つ「社会は存在する」（2020年、ジョンソン英首相がコロナ罹患後の復帰記者会見でイギリスの社会保険制度の有効性について発言した中のフレーズとして各報道機関が言及した）。

『推し、燃ゆ』の主人公は高２の女性で、彼女はアルバイトで得たお金をすべてアイドルのプロマイドなどのグッズに投資する。挙句の果て（という言い方が場違いなのかもしれないが）成績不良で留年、高校中退して後悔がない。そのことについて親もそれほど深刻に考えていないという状況設定で筋書きは進行する。以下は主人公のつぶやきの一齣である。

携帯やテレビの画面には、あるいはステージと客席には、そのへだたりぶんの優しさがあると思う。相手と話して距離が近づくこともない。あたしが何かすることで関係性が壊れることもない、一定の隔たりのある場所で誰かの存在を感じ続けられることが、安らぎを与えてくれるということがあるように思う。なにより、推しを推すとき、あたしというすべてを賭けてのめり込むとき、一方的ではあるけれどあたしはいつになく満ち足りている。（宇佐見りん『推し、燃ゆ』、『文芸春秋』202１年3月号、376ページ　2020年後期、第１６４回芥川賞受賞作品）

パンデミック以前の構想にもとづく作品なのだろう、コロナ禍への言及はない。コロナ禍下でアイドルが出場する会場の設営その他がどのような位置づけで場面展開するのか読んでみたかったが、ないものねだりはこれまでにして、主人公は自己の利害を中心に判断して行為設定を行い、それが他者選択の基準になっている。したがって、世間は社会に溶解し、その社会の住民はITを駆使していて、その社会に相応しい規範と他者の規範のすり合わせをおこなうことが常態になっている。

両手を広げた程の距離をお互いに確保する密回避の作法もその試みのひとつで、この作法はごく当たり前に通用するようになっている。この回避行動が定着すれば、この国の隅々に行き渡っている世間の威光に変化が現れるかもしれない。理由のひとつは、人びとを取り込んでいる世間の威光は彼（女）の不在であるという仮説からすれば、きわめて興味深いことだ。彼とは不特定多数のもうひとつの言い方ではあるが、次のような意味である。

吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』（岩波書店）を読みだしてすぐに、初冬のある日、コぺル君はおじさんと一緒にデパートの屋上から下を見下ろして、たくさんの人や車があるいは自転車が行き交う様子をみて「人間網目の法則」と名付けるシーンが出てくる。『君たちはどう生きるか』の中でも読み応えのあるページだと思う。

親から命を授かり、本田潤一という名前を付けてもらい、コぺル君というもうひとつの愛称で呼ばれるようになり、幼さからさにようならをして、自立した青年の入り口に差しかかったシーンである。本田潤一がもうひとりの自分を見つめる第三者（彼あるいは彼女）の目を自分の中に取り込んだ瞬間である。

この認識とともに、いわゆる良心の核となる社会的自我を自分の中に取り込み、それを丸ごと認知し、一個の人間として責任をもって受けて立つ根拠を持つことになった。こうして事態を受け入れられるようになれば、物事を阿吽（あうん）の呼吸で処理するだけでなく、必要であれば言葉を介して自己を社会関係の中で外部との対応に必須の情報処理を行うようになる。

『君たちはどう生きるか』でもうひとつ注目すべきシーンがある。校庭でコぺル君たちの仲良し仲間が雪玉を投げ合う雪合戦で、上級生たちの作った雪だるまを不作為で壊してしまった雪の日の出来事の場面だ。この出来事への対応をめぐって、コぺル君は病床に就くことになる。良心と勇気と友情の葛藤をいかに解きほぐすかという青春期特有のシーンが描かれている。では、何が問題の核にあるのだろうか。主我と客我との葛藤である（アイIとミーmeの葛藤ともいう）。忠たらんとすれば孝たらず、孝たらんとすれば忠たらずの二律背反の類例である。

コロナが跋扈するようになってから、なんとなく面倒なマスクを四六時中着けているのが当たり前になって、着けていていないと自分のみならず、第三者の利害にかかわる大切なルール破りになるという具合である。私が公を、公が私をわきまえての行動場面がごく当たり前になり、それぞれのマイナスをプラスに転化する契機になる創造の場面が多くなっているとみなすと、コロナ禍は転じてプラスへの転轍手になりうる。「交通ルール、知ると行うは大違い」（中学生課題入選標語）ということで、これは一例である。

この延長線上にあるのは、目には見えない働きである。日常的な問題からより広がりと深度のある問題を含めて、自覚的な問題解決方法をいかに日常化できるかということだ。

その試金石は意外な問題で顕在化した。日本学術会議問題である。この問題の核心にあるのは、学術会議が会議体として軍事兵器開発研究に研究者の参画を拒否する声明を発出してきたことにある。こうした日本学術会議の姿勢に、政権は憲法との整合性と経済界との意思疎通維持から公に論議することを回避したいので、学術会議員補充推薦という従来から行っている事務行為に対して拒否理由を提示する代わりに、人事不介入の原則を盾に政権の思惑に従わないアクティブな会員候補は任命しないというメッセージを出したところに、今回の拒否問題のねじれがある。波紋が立っている。このねじれは政権の体質にしみついているゆえに解きほぐし難い。

私の成熟が公の成熟を追い越したのだ。そのことを上述の芥川賞受賞作品は物語っている。